

東洋文庫

82

菅江真澄遊覽記
3

平凡社

菅江真澄 著
内田武志 編訳
宮本常一

うちだたけし

内田武志 明治42年秋田県生。日本常民文化研究所員として、「静岡県方言誌1・2・3」「日本星座方言資料」「菅江真澄未刊文献集1・2」,ほかに「真澄遊覧記総索引歳時篇」「松前と菅江真澄」「真澄遊覧記抄・秋田の山水」「菅江真澄の日記」などの編著あり。現住所 秋田市手形山崎9～24

みやもとつねいち

宮本常一 明治40年山口県生。大阪天王寺師範学校卒。専攻 民俗学。日本常民文化研究所研究員,武蔵野美術大学教授。主著「瀬戸内海の研究」(未来社)「日本民衆史」(未来社)「日本の離島」(未来社)。現住所 東京都府中市新町3～9～12

菅江真澄遊覧記(3)〔全5巻〕

東洋文庫 82

昭和42年1月10日 初版発行

定価 500 円

訳 者

内 田 武 志
宮 本 常 一



東京都千代田区四番町4番地

発行者 下 中 邦 彦

発行所

東京都千代田区
四番町4番地
振替・東京29639

株式会社 平凡社

落丁・乱丁本はお
取替えいたします

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

目 次

牧の冬枯	三
奥の浦うら	三
牧の朝露	五
おぶちの牧	六
奥のてぶり	六
津軽の奥 (一)(二)(三)(四)	二二
すみかの山	二四
外浜奇勝 (一)(二)	二九
雪のもろ滝	三六
津軽のをち	三六
津軽のつと	三七
外浜奇勝 (三)	三九

解 説

内田武志 三六

牧の冬枯

牧の朝露

おぶちの牧

奥のてぶり

凡国奇器

津軽の奥

すみかの山

外浜奇勝

津軽のをち

津軽のつと

錦の浜

あとがき

内田武志

三三

旅のあと（本文挿入地図）

その一 牧の冬枯・奥の浦うら

五

その二 牧の朝露・おぶちの牧・奥のてぶり

六

その三 津軽の奥(一)・津軽の奥(四)

二五

その四 すみかの山・外浜奇勝(一)・雪のしろ滝・津軽のをち

二七

その五 津軽のつと・外浜奇勝(三)

二七〇

菅江真澄遊覧記

3

宮内省菅

本郷田江

常武真

一志澄

編訳 著

凡 例

一、かっこ内のことば

〔 〕 真澄の著書名

《 》 原注

（ ） 訳注

一、本文の月日は旧暦による

一、和歌・俗謡・方言などは原文のまま

一、アイヌ語はカタカナで表記した

牧の冬枯

(地図 5 ページ参照)

追手の風が毎日吹いているが、便船を前から約束してあつた船頭が、自分の生活をたてる業にばかりなにかとたずさわり、いっこうに乘せてくれず、またわたくしもながい月日をすごしたこの地にも心をひかれて、まだこの島（北海道）に滞在していた。

「幸いなことだ、九月の松前の風物をいっしょに見よう、心をこめた酒宴を設けて」などと、人々のさそいのことばに慰められ、菊の香りのかんばしい高い山路をのぼったり、岡辺の薄がうちまねく夕暮れの風景を眺めたりしていると、はやく帰国したい気持はさらにおこらなかつた。露にぬれた袖をしぼり、

野原の鹿のあとを尋ねては知らない林のなかに迷いこんだり、峰の紅葉の色濃く染まった梢にむかうと、いくら見てもみあきぬ錦のような美しさに、たち去る気分にもなれない。

しかし、惜しんでも秋の短い日は暮れやすく、そして日数を多く重ねると、袖を吹きなれた秋風も、もはやきのうにかわつて、きょうはこがらしと名をかえて、落葉してさびしくなつた樹の梢も十月の初空、きょうは一日となつた。海は朝なぎで、よい追手風が吹いて、松前城主（松前章広）が船出されてゆく。船人たちが櫓拍子をそろえ、さざ波を漕ぎながら、「きさらぎやんまの楠木を、ふねにつくりて今おろす、柱しろがね、せみこがね、あややにしきの帆をあげて」と、声のかぎりにうたうのが潮路はるばると聞こえ、御船印の帆影が沖ふく風にふかれて、まもなく遠ざかつて行くのを、見送り奉る貴賤の人々が磯辺に満ちあふれ、人ごとにきょうの日和を喜びながら去つていった。

六日 朝のあいだ雨が降り、昼には晴れた。このごろ、もっぱら人が語っている話題は、紀伊国の船人が大ぜい、卯の年（天明三年）のころ波にさらわれ、風に吹かれて漂流し、カムサツカという荒蝦夷の遠い国（ロシア領カムチャツカ半島）についたが、十年ばかりの間にその多くは、あるいは死に、あるいは病人となった。その生き残った者をつれて、このたびカムサツカのロシア人が四十人あまりで、東蝦夷の国きいたつぷ（北海道根室）というところに來て、国の守に貢を奉るとか申し出たという話がある^{（注）}と、うわさされている。むかしから、このような例は聞いたことがないので、よいことであろうか、また悪いことであろうかと、人々が話しあっていた。きょうは、よい日和であると船頭が知らせてきたので、寛政四年（一七九二）の冬十月七日、松前の福山（松前郡松前町）の東、泊川の磯やかた、佐々木信英の家の軒近くにつながれてある船に乗った。

船が行くにつれて、吉岡の山（福島町）、当別（上

磯町）のまろ山などを遠く見ながら離れてゆき、やがて崎がいくつも横たわって、船出してきた方向も何処だかわからなくなり、うすきし（函館）ばかりは、わにが浮き出たように、海の上にたいそう近うかんでみえる。このあたりの潮流も静かなので、船の中では船人らが、「毎年、松前の島にわたるときとは何度にもなるが、波もたいらで、こんなに海がすこしも荒れないなぎの日は、またとないことだ。ああ、たのしい、飲めや歌え」と船端をたたいて盛んにはやしたて、盃をとって、鼻声になって語っているうちに、南部路（下北半島）も近くなって、山の梢まであらわに見えてきた。それを眺めながら進んでいくと、あたりはうす暗くなり、太陽は遠く波のかなたに沈んだが、月が高くのぼったので、なおこの光をしるべに船をすめようという。そして奥戸（青森県下北郡大間町）という浦に着いて、今夜は小谷という磯辺の家に泊まった。

八日 近所に矢根杜の神社といって、八幡の神が

鎮座ましますのに詣でようと、朝早く磯をつたい、山かげを行ったが、多くの馬が群れ歩いているのは、牧場が近くにあるのであろうか。^(注三)山の裾や田面に柴垣を高く結いめぐらしたなかに、たくさんの馬がたたずみ、あるいは枯草をふみしだき、高い島山の峰も麓もあるきならして、あるかぎりの小笹、木の根を掘って食べては、いなないている。このような牧は、南部領に十三ある(第二卷「岩手の山」の注三参照)という。奥戸は、下北半島にあるふたつの牧の一つだとのことである。尾駁の牧(「岩手の山」の注三参照)は、七戸の辺に尾貴津^{おきつ}というところがあり、そこをいうのかと問うと、おぶつにいまは牧はないが、すべてそのあたりに牧があるのでいうのかもしれないし、昔あったのかもしれないと答えた。赤石という村(大間町、いま家がない)にきた。磯辺の石がことに赤いのでそうよぶのである。山かげにも馬がたいそう多かった。このあたりも牧であらうかと聞くと、いや、そうではない、この辺では

野馬の子をみなとりつくして、秋の末から木戸口をおし開けて親馬を捨てるので、この馬が村境を越えてあさり歩き、枯れ残る木の葉や葛などを食い、雪が降って馬の秣^{まき}がつきると、磯に寄せるわかめ、ほんだわらなどの海藻類を食物としているのだという。海にのぞんだ岡に小さい神の祠があるまわりを、材木石^{ざいもくいし}という細い柱のような石をつみかさねて瑞垣^{みぎは}(神域の垣)としている。祭神は、百年のむかし、塩釜(海水を釜で煮つめる製塩用の釜)がここにあったので、現在そのあたりを神にあがめ奉っているのである。今年は、この浦じゅうのひとが残りなく病氣にかかったが、この神の加護によって、わたくしの家をはじめ、この辺みな無事であったと、牛鞍^{うしざん}を繕^{つく}ろっていた老人がたばこをくゆらせながら語のを聞いて、この社に詣でた。山をひとつ越えていった、さえもく(材木)というところの神社のある下方をはじめ、立っている岩はうち割ると、みな柱のようになっている。これ運びだし、船に積んだ

り、あるいはねり、そかつら（木蔓）の綱をつけて、宮木（社寺や宮殿の建築用材）などを引くように人力でひき出し、石垣や塀などにそれぞれ使っている。それで、ここをやがて材木村（大間町）とよぶようになったという。

原田（佐井村）などというところを経て佐井（下北郡佐井村）にきた。こちらを小佐井といい、港のあるほうを大佐井という。渚に小島があり、おごそかな神社の見えるのは、弁財天がまつられているのである。神明社に詣でると、慈眼山清水寺という優婆塞（山伏）の寺があった。その主を自性院という。八幡の神社にもこの優婆塞が奉仕している。川ひとつ渡って矢根杜（やのねり）にのぼった。この神垣の内外やあるいは近い家の庭、磯辺などに石弩（矢の根石）があるので、この杜をやのねりというのである。

安倍の軍勢を滅ぼそうと討伐にむかわれたころ（前九年の役、一〇六〇ごろ）、源頼義が石清水八幡をここにうつし祀られ、武蔵の国鈴が森の八幡の神

を本宮とさだめられたとか語られている。中昔のころは荒廃して神垣もなく、自然に草木が茂って、社のあとも見えなかったので、鈴が森の神主森田信辰という人がこの近くに来て、「太麻たへて神のかかみも朽にけりまつる人なき松のあらしや」と嘆いて詠んだ。寛永元年（一六二四）のころ、自性院法印賢教という修験者の夢にこの神が現われたので、おどろいて、その教えのままに土を掘ってみると、ちいさい鏡のうらに、ほんたのみこと（誉田別命、八幡神）を鑄たのを得た。賢教は涙を流してよろこび、衣の袖につつみ奉って家に帰り、これを祀って拝していた。延宝二年（一六七四）甲寅の七月に、ふたたび御社を清らかにつくりかえ、そのときの修験者大昌院が、鈴が森の本宮にこのことを告げてやると、神主が来て、鈴をひき、幣を奉って「たへたるもまた引おこすみしめ繩ちよ榮へ行く神のまにまに」と詠んだという。

大佐井の南によこたわり、さし出ているところを

矢越という。頼義のひきめ、のやじり、があつたところから、今も崎の名としてゐる。またその矢が磯への波にただよつて寄せてきたからといって、磯矢といふところもある。南へ行くと長後、福浦、牛滝などであるが、仏が宇多（仏が浦）というところがあつて、その石の形が卒塔婆（墓場に立てる仏名を書いた板）に似ている。このあたりの材木石はことに長く、五尺、七尺に及んでいる。これは源九郎判官義経が、この磯から松前の島に橋を渡そうとして、たくさんの材木を牛につけてひかせてきたが、その牛が倒れふしたので、ここに牛滝の名がある。その材木もみな石に化して、この材木石になつたと、牛ひきの子供が語つた。神前に詣でると、アイヌが奉つた弓矢とイナウがあつた。荒蝦夷の心もなごやかにこの神の御恵みにひかれなびいたからであらうか。また同じ道をかへつた。この佐井の浦人竹内善右衛門とかいふ者が、赤人のいる島にながついて、その国にいりまじつて住み、いまその孫もあつたが、

今年カムサツカ人につれられてきた（牧の冬枯・牧の朝露）解説参照）などと、行きかう人が語つてゐた。夕方近く奥戸に帰つてきて、夕月のかげも明るいので、松前のほうをながめて歌をよんだ。

十日 馬で奥戸を出立した。大川目、小川目という山川がふたつあつたが、みな凍つていて、たいそう寒い。大畑に行くのに山越という道があり、山越という道もあり、また大間の浜路もあつた。わたくしは、中山越を行つた。小奥戸といつて、むかしの里があつたところにでた。いったいに柵を結いめぐらした牧場の中路を行き、七郎台という、高い峰の麓の広野にいつて見たすと、海岸から山の奥まで馬柵を結いわたしたのが、ちょうど虹でもかかつてゐるように見えた。なお進んで行くうちに、大間の牧の柵の内にはいつた。このごろは木戸が開放してあるので、どちらの馬も区別なくいりまじつて遊んでいるが、奥戸の馬は目印として、右の耳を切り、大間の馬は左の耳をさいであるので、これを目印と

して春にはとりいれるのであろう。同じ牧の内に百匹あまりの母駄馬がいるが、雄馬ひとつをおいて、三十、四十の子をうますという。その父馬を冬になるととらえて、近くの里に引きとって舎飼する（馬小屋で飼う）ということである。

佐賀森という磯の高い岩のあたりの笹原をふみわけて行くと、霜が真白に冴えていた。磯辺に大間の部落（大間町）が見えた。五倫田（風間浦村）のくぐり岩などを通つてくると、山田（山をきり開いて作った田）がある。これは稲をうる田ではなくて、田稗を植えるのである。いまはひえを刈った朽根ばかりが残っているところに霜がふかくおりて、寒かった。釜谷の浦にでた。ここの実の名は蛇浦というが、農漁民のなりわいに蛇を忌むことがあるので、一般に蛇浦とはよばないという。

異国間（易国間）というのは、むかし高麗人が漂流してきてからという地名だと、ところの人が語った。またこの浦にアイヌが住んでいて、その子孫は今も

いるという。ほどなく日かけ山というところに来た。杉ノ尻（菅ノ尻）、桑畑、焼山の麓をわけ行くと、作馬台というところがあった。枝折崎（日和崎）というところの左は海、右は密林の山である。長浜という浜路をはるばると過ぎて、大湯、新湯といつて二つの温泉がある下風呂という里はずれの、岩が群がって海岸にのぞんだ危い路を、岩面に袖ふれながら行くと、おもむきのある滝があつて、そのしぶきにひどくぬれた。甲崎は、その形がかぶとにそっくりである。

赤川（大畑町）という里は山川の水が赤かった。むかし源頼義が、ちぢりの岩屋にこもつて、尻屋の鬼（尻屋崎のホロボにかくれた蝦夷）を射たててこれを斬り伏せなされたとき、従つていた兵らが血にそまつた太刀を洗つてから血川というようになった。今は赤川とよんでいるが、その理由は、まそ（アカソ）のように朱色であるからという。水渋によつてひどく赤くにぎった流れだからである。木野部（大

畑町」というのも、むかしは鬼の府と書いたのだがと、年老いた人がおしえてくれた。七曲とかいうつづらおりの路を目暮れ近く行くと、柴を負うたものが歩いていて、「さあおいそぎなさい、日が暮れてしまします」と、先だつてさつさと過ぎてゆくのがくやしかった。釣屋浜、由阪ですつかり暗くなつてくだると、川があつた。舟で渡つて大畑（下北郡大畑町）につき、堺某の家に宿をとつた。

二十一日 夢で故郷の国にいとみて、朝になつたので、

霜さゆる草の枕もふる里をおもふはかれず夢むすぶらし

父母にお会いしたかと思うまに夢がさめたので、

ちちふ山ははその雪やいかならん身にとし月のつもるおもへは

二十二日 恐山へうそれ山といい、おそり山という《にのぼりたい》と思い、このごろずつとこの里に滞在しているのだが、山々はふかく雪がつもり、剣

の山などという險阻で知られた岩の群れだったところを登ることはむづかしからうと、しきりに引き止められた。そして田名部から詣でるのが本当で、道もひろくよく整つており、行きやすいであらうといわれるままに、きょうはその里へ行こうと志し、出した。

西にたいそう近く見えた朝日向山（朝比奈岳）、佐土が台（佐藤平）というこのふたつの山が、海岸にたいそう高くそびえ、松前からの眺望にも、はつきりと見えた高峰であつた。佐土が台の麓に日曜大権現といつて、尊い神の祠がある。また小名目村というところを経ていくと、冠岩というおもむきのある大岩があつた。また羽色というまきの荒山があつて、たくさん宮木を伐りだしている。むかし、この山の材木を五万五千両の黄金をだして買ったという物語のあるところからも、この高い山がどんなにひろく、大木が多いか想像できよう。その山の麓にも、はいろの神といつて、三種の神宝をまつた御

社があると聞いたが、いまは雪がふかいので詣でることができなかった。

過ぎてきた下風呂の海岸に、札石^{ふだいし}といって何か書きつけたようにみえる石があり、潮がひいたときを待って、まれに見ることができると人が語り、血散^{ちぢり}浜^{はま}《むかし鬼の頭を斬って、あたりに血が散ったところからいうそうである》の岩屋のおもしろさもとおり道がちがつて見られなかったと、いま案内の人が言うのを聞いて残念に思った。里を離れて、のごろ、というところを出て浜路をくると、正津川^{しょうしんがわ}という村に小川（大畑町とむつ市の境）があった。この水上は恐山の湖からでる流れで、その古い名は三途川^{さんずがわ}とい、慈覚大師の作られた姥^{うば}の像があったのが、洪水のために山上から流れでたので、そのままこの村に堂をたててあがめている。水のさかまく高い岸に、材木をならべて三尋^{みつひろ}（五メートルぐらい）ばかりの橋をわたしてあるが、古くなってなけば傾き、柱もぐらぐらと朽ちかかって立っているのをかろう

じてわたった。ほどなく烏沢^{からすざわ}という小さい村が崖のかげに見えてきたが、みつよつ、烏も鳴いた。

川代^{かわしろ}という村を右方に近く見ながら、関根村についた。ここは恐山の麓にたいそう近く、むかしはここからわけのぼったものだが、今は村の家々がたくさんたちならんでいるので、反対側の田名部からの路をとおって詣でるという。このぬかるみの道をはるかに遠くまで丸太を敷きならべてあるので、梯子の上をわたるようにらくにたどられる。これは、ほかの国では見たことがない路のありさまである。この道歩く人は、領主の御恵みを感謝するであろう。樺山^{かはやま}《かばの木のたいそう多かったところからいう名だろう。皮をとり、たいまつとする木である》村を過ぎて、山ふたつを越えた下の方を鶴沢という。むかしは、この沢のへり近くまで潮が満ちてきたところであったが、今は遠く退いて、鰻^{あわび}つり沢の名だけが残っていると、馬をひく男が言った。女館という村があり、むかし蝦夷の女たちががたむろしたとい

う物語がある。栗山という村が後方に見えて、はや田名部の里も近いのであろう。日が暮れて入相の鐘とともに夕時雨を吹きさそってくる山かぜで、雨具をとりだす間もなく、ひどくぬれてしまった。ほどなく田名部（むつ市）について、新相某という旅館に宿をとった。その家の子供たちが集まってきて薪をくべてくれたので、ぬれた着物をかわかした。

二十九日 雪は日増しに多く、きょうもさかんにふっているが、この里のならわしで庇をひろく作り、その軒端ばかりを行きかいするの^(注)で、売り買いする人はらくにあるいている。

三十日 きょう、山の湯へおそれ山をやまの湯という^いへ行こうと、子供を案内にして午前十時ごろ家を出て、里の西から山路にむかい、雪をかきわけて行く道には丸太をならべてあり、途中とどこころに柱を立てて、方向が書かれてあって道しるべになっていた。二股川を経て長坂を行って、おおぶなという木の枯れた根もとに深くつもった雪をふみち

らし、たたずんで尻屋崎や大畑の浦を眺望すると、蝦夷国の恵山（渡島半島の恵山岬）から離れて右方の遠い沖に、しろじろと泡がただよっているように、ほのかに見知らぬ高い山がみえたが、それは何という岳で、どういう蝦夷のいる島であらうか。毎日眺めていて知っていることもあらうかと、木こりが何人もくるのに尋ねると、これは雪がかかっているの^いでそう見えるのであろう、ふだんは青海原で、まったく何もみえない方向であるといつて去っていった。南方に釜臥の岳（八七八メートル）が麓から山頂にかけてのこりなく眺められ、芦崎、安渡の入江（大湊湾）につづいて対岸の野辺地の浦うらが見わたせた。

すべてこのあたりをさしてむかしは那多郡といい、階上郡ともいってはつきりしないが、いまはもっぱら北郡田名部の庄といいならわしている。むかしは、このあたりの海辺もみな外が浜といわれたところであつたろうが、近世では津軽路にだけあるようにい